

学習ノート「青谿書偶題」を読む

令和6年2月3日

担当 齋藤 高木 俊彦 左起子

繁子 良子 西村 宮崎

青谿書院偶題

山陰総是山  
吾里在其間  
去里數百武  
一谿殊幽閑  
我来結茅宇  
蕭然瓢與箏  
所事只琴書  
倦余或倚欄  
孤松窓外聳  
細泉簷下流  
涼風度樹杪  
林禽轉素秋  
周圀皆山嶽  
隱映更一川  
白沙連青野  
草中起人煙  
我曾攬此勝  
風月已幾年  
世縁日以隔  
興味愈々憐  
携童歩苔徑  
焚香坐山窓  
夙志慕前哲  
高尚追遐踪  
嗟夫拔群士  
作事不痴頑  
出世不得意  
入山早閉關  
我亦不遇者  
役々竟何爲  
行蔵有典型  
卷舒宜隨時

青谿樵夫

山陰は総て是れ山  
吾が里は其の間に在り  
里を去ること數百武  
一谿は殊に幽閑なり  
我は来たりて茅宇を結び  
蕭然として瓢と箏と  
事とする所は只琴書のみ  
倦余には或いは欄に倚る  
孤松 窓外に聳え  
細泉 簷下に流る  
涼風 樹杪を渡り  
林禽 素秋に轉る  
周圀は皆な山嶽  
隱映す更に一川  
白沙は青野に連なり  
草中に人煙起る  
我曾て此の勝を攬る  
風月已に幾年ぞ  
世縁日に以て隔たり  
興味愈々憐れむ  
童を携えて苔徑を歩き  
香を焚いて山窓に坐す  
夙志前哲を慕い  
高尚遐踪を追う  
嗟夫の拔群の士  
事を作して痴頑ならず  
世に出づるも意を得ず  
山に入りて早に關を閉づ  
我も亦遇わざる者  
役々として竟に何をか為す  
行蔵典型有り  
卷舒時に随う宜しく

青谿樵夫

山陰地方はすべて山だ  
私の住む里はその間にある  
里から少し離れたところに  
物静かな溪谷がある  
私はここに茅葺きの家を建てた  
物静かに質素な生活をしている  
ひたすら書を読むだけ  
一本の松が高くそびえて  
水の小さな流れが家のそばを流れ  
涼しい風が梢を揺らしていく  
小鳥が秋なるとさえずっている  
周りはみな高く連なつた山  
その間を流れる川は見え隠れし  
川辺の白砂は野山の緑に連なつて  
田畑からは煙が立ち上ってくる  
私がこのすばらしい景色を選び  
自然を愛でてもう何年も過ぎ  
世間とは日ごとに隔たりができ  
楽しみはますます味わいが深まり  
塾生を伴い苔道を散策する  
線香を立てて山際の窓べに座わる  
早くから志を立て先賢を慕い  
志高くはるか遠いひとを追う  
ああそのすぐれた人たちは  
何をしても愚かで頑なことはなく  
世に出て意に会わなければ  
すぐに山に入って門を閉じた  
私もまたあわない者だ  
苦しみなながら何ができるのか  
出処進退には見本がある  
生き方は時に従つていく

青谿樵夫

偶題Ⅱグウダイ たまたま題すること 詩文を予期せずにつくること  
武Ⅱブ 長さの単位 幽閑Ⅱユウカン もの静かなこと

茅宇Ⅱボウウ みすぼらしい家 蕭然Ⅱショウゼン ものさびしいさま  
瓢と箆とⅡ 参考論語「一箆食、一瓢飲」 (論語) 貧しい食事のこと  
幽閑Ⅱ奥深くて静か 琴書Ⅱキンショ 琴と書物 知識人に必要なもの  
倦Ⅱケン 疲れる 余Ⅱヨ あまり 倚Ⅱヨ よる もたれる

簷下Ⅱエンカ 軒下 樹杪Ⅱジュビョウ こずえ

禽Ⅱキン 鳥 素秋Ⅱソシュウ 秋

隠映Ⅱインエイ 見えたり見えなかつたり  
人煙Ⅱジンエン 人家からの煙 白沙Ⅱハクサ 白い砂

攪るⅡトル とる 愈Ⅱイヨイヨ  
憐Ⅱアワレム 心惹かれるいとおしむ 憂えるさま

苔徑Ⅱタイケイ 苔のむした小道

夙志Ⅱシュクシ 以前から持っていた考え

高尚Ⅱコウショウ けだかい  
遐Ⅱカ 遠い 踪Ⅱソウ あと

痴おろか

夫Ⅱカノ 痴頑Ⅱチガン 痴おろか 頑かたくな  
關を閉

役々Ⅱ心身と苦しむ 竟Ⅱついに

行蔵Ⅱコウゾウ 出処進退

典型Ⅱテンケイ 手本

卷舒Ⅱケンジョ まいたり広げたりする 才能を隠したり外へ出したりする

